

つれづれぐさ

徒然草

兼好法師

参考①ウィキペディア

②新潮日本古典集成「徒然草」

③角川書店「鑑賞日本古典文学十八巻」

第五十二段

仁和寺にある法師、年よるまで、石清水を拝まざりければ、心うく覚えて、ある時思ひ立ちて、ただひとりかちより詣でけり。極楽寺・高良などを拝みて、かばかりと心得て帰りにけり。

さて、かたへの人にあひて、「年比思ひつること、果し侍りぬ。聞きしにも過ぎて、尊くこそおはしけれ。

そも、参りたる人ごとに山へのぼりしは、何事かありけん、ゆかしかりしかど、神へ参るこそ本意なれと思ひて、山までは見ず」とぞ言ひける。

少しのことにも、先達はあらまほしき事なり。

【口語訳】

仁和寺にいる僧が、年を取るまでに石清水八幡宮に参詣したことがなかったので、残念に思つて、ある時思い立つて、ただ一人歩いて参詣した。極楽寺・高良神社などを拝んで、(石清水八幡宮に参詣する目的を果たしたので)「山までと思ひ込んで帰ってきた。

さて、知り合いに会つて、「長年思つていたことを、果たしてまいりました。うわさに聞いていた以上に、尊くあられましたよ。それにしても、参詣する人が皆、山に登っているのは、何事があつたのでしょうか。みたいと思いましたが、神へお参りするこそ本来の目的と思つて(いたので)、山の上)までは見ませんでした」と言つたといふ。

ちよつとしたことにも、案内人は欲しいものである。



「徒然草」

鎌倉時代後期から南北朝初期に成立した随筆集。筆者は兼好法師と言われている。平安中期の清少納言による「枕草子」と平安末期の「方丈記」(鴨長明作)とを併せて、日本三天随筆の一つとされる。

「つれづれなるままに、日べらし、硯(すずり)に向かい、心に移りゆくよしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるおしけれ」という、有名な文で始まる。

「つれづれなるままに」とは、特にやることもなく、ぼんやりと過ごしている、くらくらの意味である。一日なすこともなくぼんやりして、硯に向かい、心に浮かんでくるあれやこれやを紙に書き写していると、いつの間にか、不思議に心の高まりに襲われてくることよ、とこの文である。

ちなみに三天随筆の冒頭文は以下のようである。

①「枕草子」…「春はあけぼの。ようよう白くなりゆく山ざわ、少し明かりて、紫立ちたる雲の、細くたなびきたる」

②「方丈記」…「ゆく河のながれは絶えずして、しかも、もとの水にあらず」

序段を含め、二三四段の短いエピソードからなり、その鋭い人間観察や、現実から距離を置いた批判精神、合理的な判断力と求道精神、美意識と現世肯定の人生観など多様な内容が含まれ、温かい人間味あふれる筆致は、明治以降、西欧のモンテーニュの「エッセ」にも比せられた。特に、文芸批評家の神様と呼ばれた小林秀雄は、兼好の観察眼を「見えすぎる眼」と呼び、「空前の批評家の魂が出現した文学史上の大きな事件」と評した。

引用文は、教科書などにも取り上げられた有名な逸話。仁和寺の高僧が、京都南部の男山の頂上にある石清水八幡宮を参拝しに行ったが、山の麓にある高良神社や極楽寺を、八幡宮と勘違いして、帰ってきてしまったという話。「たくさんの人が山に登って行ったけど、石清水を拝み終わったので、帰ってきたよ」などと、意気揚々としゃべっている、身分の高い僧侶の失敗をからかう表現は、兼好の権威を嫌う心情を感じさせる。

【筆者 兼好法師】鎌倉時代末期から南北朝前期に活躍。生没年の詳細は不明。若いころ宮任えした後、出家遁世した。歌人として有名で、古今の古典に通じ、室町幕府の人間とも交流があったようだ。